

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月17日現在

機関番号：32610

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2011

課題番号：21592840

研究課題名（和文） 思春期の子どもをもつ家族のヘルスプロモーションにつながる養育支援プログラムの構築

研究課題名（英文） Establishment of child-rearing support program contributable to health promotion of family having adolescent children

研究代表者

岸田 泰子 (KISHIDA YASUKO)

杏林大学・保健学部・教授

研究者番号：60294237

研究成果の概要（和文）：

本研究は思春期の子どもたちとその家族が抱える健康問題や養育に関する問題を明らかにし、参加型の親支援プログラムを作成、実践し、その効果を検証する試みである。まず思春期の子どもたちと親への調査をもとに、健康問題や養育に関するニーズを抽出し、プログラムを作成した。その後、思春期の子どもをもつ親を対象として月に1回、計5回のプログラムを実践した。その結果、このような支援が思春期の特徴を理解される機会となるとともに、親自身の健康に対する意識変容にもつながり得ることが示唆された。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of this study is to clarify the problems related to health and child-rearing in the families having adolescent children, to design and conduct a participatory program for supporting the parents, and analyze the effects of the program. First, the health and child-rearing problems were extracted from the results of a survey targeted for adolescent children and their parents to design a child-rearing support program for the parents. Then, the program was carried out once a month for the parents having adolescent children and repeated five times in total. The results suggested that such a supporting program can provide the parents with opportunities for understanding the characteristics of adolescence, and at the same time, may produce a good effect that the parents can change awareness about their own health.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,900,000	570,000	2,470,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
総計	3,600,000	1,080,000	4,680,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・生涯発達看護学

キーワード：思春期、家族、ヘルスプロモーション、プログラム

1. 研究開始当初の背景

近年、思春期の子どもたちの問題行動や凶悪犯罪の横行が新聞紙上を賑わせており、早急な社会的対策が必要と考えられる。この背景には家庭における教育力の低下、親と子の微妙な感覚のズレから生じる家族間の摩擦、人間関係に悩む若者のライフスキルの低下など、思春期の子ども自身の問題だけでなく、子どもをもつ家族もまた同様に悩みを抱えている現状がある。少子化が進む中で、乳幼児をもつ親の支援に関しては様々なアプローチが取られているが、我が国における思春期の子どもをもつ家族のための支援は圧倒的に少ない。しかしながら欧米では学童期から思春期にかけての養育支援プログラムの歴史は古く、構造化され、組織的に実践されているものが散見される (Boys Town, 2008, Levac, 2008)。文化慣習のちがいがあ、海外のプログラムをそのまま援用することには無理があるが、これらを参考にした国内での独自の支援プログラムを開発することができれば、親たちに子どもの養育に関するヒントや指針を示すことにつながり、そのことによる親子の健康増進効果も期待でき、より具体的な支援の提供となり得ると考えた。

研究代表者 岸田はこれまで継続して思春期の健康に関する研究に取り組んできた。インターネットを利用して開設した思春期保健相談 (平成 11 年～12 年度 科学研究費) は現在も行っているが、このサイトに寄せられる思春期相談の中には、家族に相談すれば解決できそうな問題が少なくない。しかし相談者の多くは「親には相談しにくい」ことを理由にサイトを利用し、また家族との関係に悩む相談や希薄な家族関係が伺える事例も多い。「思春期の子どもをもつ家族支援に関する研究」(平成 15～17 年度 科学研究費 基盤研究(C)) では、子どもたちの健康と家族機能との間に有意な関連があることがわかり、子どもたちの健康の保持増進には家族支援が鍵となる結果であった。さらに「思春期の健康アセスメント尺度の作成」(平成 18 年度～19 年度 科学研究費 基盤研究(C)) では、子どもたちの健康感に影響する要因が生活全般にわたる中で、やはり家族の影響が強いことも明らかになった。これらの結果は欧米の調査結果 (Andrea, 2005) とも一致する。すなわち家族関係、家族機能が健康的であればこそ、子どもたちの健全な養育につながると考えられる。

また研究分担者らとともにこれまでの研究により、乳幼児期の育児支援としてカナダで開発され、国内で普及されつつある親教育プログラム「Nobody's Perfect」(原田, 2006) を地域で展開することによる効果も検証し

た。Nobody's Perfect は、0-5 歳までの子どもをもつ親を対象とした教育的介入であり、特定の研修を受けたファシリテーターにより実践される参加型プログラムである。このプログラムでは就学期以降の児童をもつ親は対象外となる。以上のようなことから本研究では、思春期の子どもをもつ家族支援の一環として、思春期の子どもたちの養育に関するニーズを把握した上で、Nobody's Perfect に準拠した、国内独自の思春期の子どもをもつ親支援プログラムを作成し、その実践による介入と評価を行った。

2. 研究の目的

本研究の目的は(1)我が国の思春期の子どもたちとその家族が抱える健康問題とニーズ、養育に関する問題を明らかにする。(2)思春期の子どもをもつ親の養育上のニーズと必要なサポートをアセスメントし、子どもとその家族に必要な健康情報を盛り込んだ参加型の親支援プログラムを開発、実践し、家族に対する健康教育の介入を行い、その効果を検証することである。

3. 研究の方法

本研究では前述した目的を達成するため、次の方法により実施した。

(1) 思春期の子どもたちとその家族が抱える健康問題とニーズ、養育に関する問題を明らかにするための調査

①思春期の子どもへのフォーカスグループインタビュー

首都圏の高校において、学校を通じて調査依頼を行い、協力が得られた 1 校において、男女それぞれのグループインタビューを実施した。インタビューの内容は、子どもたちが考える健康、家族と健康、家族との関係などについてである。

②思春期の子どもをもつ親への質問紙調査

首都圏の公立中学校において、思春期の子どもをもつ母親 47 名 (平均年齢は 45.2±5.6 歳、核家族 83%, 拡大家族 13%であった。)を対象に、自身の健康を意識付け、家族の健康を考えるための教育的介入を行い、その後、家族の健康に関する内容と家族のヘルスケアニーズについて無記名自己記入式質問紙調査を行った。健康教育の企画は保護者らが行い、実施は保護者らの希望を受けて、調査者自身が行った。調査への協力は自由意思によるものとし、調査の目的、不参加の場合も不利益がないこと、プライバシー保護に努めることなどを口頭および文書で説明したの

ち、調査を実施した。

③思春期の子どもをもつ親へのインタビュー調査

思春期（中学生、高校生）の子どもをもつ母親6名に対して、個別のインタビュー調査を実施した。インタビューの内容は子どもたちとその家族が抱える健康問題とニーズ、養育に関する問題などである。

(2) 思春期の子どもをもつ親を対象とした参加型の親支援プログラムの実践とその評価

①先行研究による親教育プログラムの実態把握と内容検討

特に米国シンシナティ子ども病院メディカルセンターにおける Child-Adult Relationship Enhancement (以下 CARE) プログラムに着目し、そのトレーニングを体験した。CARE は基本的には幼児・児童を想定したもののだが、思春期の子どもとかかわる大人、養育者も対象としている。我が国の思春期の子どもとの関係にあてはめることは困難であり、改良が必要であるが、コミュニケーションの取り方などの具体的スキルの部分では十分に参考とし得る内容があった。

②プログラムの実践と評価

前述の内容を総合的に取り入れたプログラム案を作成し、実際に思春期の子どもをもつ親たちに参加型プログラムを展開した。参加者は近隣の市の広報により応募を呼びかけ、中学生・高校生の子どものもつ親とし、参加者のニーズも聴取した上で、プログラムを最終的に練り直し、月に一度、計5回の実践を行い、評価した。

(3) 倫理的配慮

本研究における調査はすべて、参加者に対して研究の目的、データの取り扱い、プライバシーの保護、結果の還元、不参加の場合も不利益を受けないなどの説明を行い、同意を得て実施した。またプログラムの実践においては、同意書へ署名をいただき、途中辞退の権利も認めた。さらに調査実施については、研究者が所属する機関の研究倫理委員会の承認を得て実施した。

4. 研究成果

(1) 思春期の子どもと家族が抱える健康問題とニーズ

①思春期の子どもたちから得られた健康問題とニーズ

首都圏の高校1校において、男女別に各1グループずつ（男子7名、女子10名）のフォーカスグループインタビューを行い、子

どもたちが考える健康、家族と健康などについて話を聞いた。

その結果、男子グループでは健康であることの要件として「病気でない」「人間関係」「メンタルヘルス」「睡眠」「食生活」「運動」「金銭」「恋愛」が挙げられた。一方女子では「病気でない」「メンタルヘルス」「睡眠」「食生活」「運動」「学校生活」「趣味・1人の時間」「家族問題」が挙げられ、若干その内容に差異があった。家族と健康について男子は「日常生活の世話」に対して「親への感謝」を示しながらも、「心配をかけたくない」という気持ちを抱いていた。また「親の威厳」に期待し、「放任」しないでほしいなどもっと親に関わってほしいとする一方「過干渉」への不満も持つ者、「父親との関係」に一線をおいている者、「家族固有の問題」や「コミュニケーション」が健康に影響すると考えている者がいた。男子に特有の事柄として「親から頼りにされる」者がいた。女子における家族と健康については、男子と同様に「親への感謝」「過干渉」「放任」「父親との関係」「日常生活の世話」「コミュニケーション」が挙げられ、それ以外に女子に特有なものとしては「きょうだいの存在」と「親への反発と後悔」があった。男子、女子いずれも親に干渉されたくないと思う気持ちの反面、もっと関わってほしいというアンビバレントな感情を抱いており、そのバランスを保った親の養育態度の重要性が示唆された。

②思春期の子どもをもつ親から得られた健康問題とニーズ

まず質問紙調査では、家族が健康に過ごすための要件について、自由記載で得られた回答から101のコードが得られた。それらを内容分析した結果、「規則正しい生活へのサポート」「食事・栄養」「円満な関係・メンタルヘルス」に集約された。母親らは家族の健康について、食事や睡眠などの基本的な生活習慣に関するサポートという日常の世話を通して家族成員個々の健康を支えると自覚しており、それとともに家族単位における円満な関係性を維持することへのニーズを有していた。

次に中学生・高校生をもつ母親6名に対する個別の面接調査を実施し、内容分析を行った。母親らが考える家族の健康も、質問紙調査とほぼ同様の結果が得られた。すなわち子どもと家族の健康に関して、食生活、睡眠、規則正しい生活のカテゴリーが挙げられ、サブカテゴリーとして、11項目が挙げられた。また面接調査による結果からは、母親らが答えた養育の現状と問題として、親以外のマンパワーを利用する、親の方針をもつ、家族のきずなで困難を越える、学校生活から子どもを守る、子どもとの距離を保つ、子どもの成

長への気づき、という6つのカテゴリーが得られた。そして母親らは家族の健康を考える機会を通して、自分たちの健康への関心を高め、生活の見直し（再構築）も行っており、その内容はアンチエイジングを心がける、自分の時間を有効に使う、夫婦関係を振り返る、メンタルヘルスを管理する、に分類できた。これらの結果から、母親ら自身の健康をサポートすることと思春期の子どもたちの健康支援を切り離して考えるのではなく、母親自身の健康を意識させることによって家族成員の健康増進への支援を強化することが有効である可能性が示唆された。

(2) 思春期の子どもをもつ親を対象とした参加型の親支援プログラムの実践と評価

成果で示した(1)によって得られた結果をもとに、思春期の子どもをもつ親を対象とした参加型の親支援プログラムの展開を計画し、実施した。

参加者は研究施設の近隣の市の広報により応募を呼びかけ、中学生・高校生の子どもの親とした。初回会合時に参加者のニーズも聴取した上で、プログラムを最終的に練り直し、月に一度、計5回の実践を行った。初回の登録メンバーは4名であり、うち父親が1名、母親が4名であった。4名の参加者は、中学生の子どもの親1名、高校生の子どもの親3名であった。また参加者は全ての回において固定メンバーとせず、一部をオープン参加とした回があり、参加人数は5回でのべ26名だった。プログラムは講義形式と参加者らによるディスカッション形式を取り、具体的内容は①子どもたちの生活、②思春期の発達と理解、③子どもと家族の健康、④学童期、思春期における発達の障害と理解、⑤思春期の子どもと家族の心の健康、とし、1回につき約2時間で実施した。初回は、この研究の趣旨を口頭および書面にて説明し、同意を得、その後、この会に期待する事柄を聴取した上で全回の内容を全員の合意のもとに組み立てた。参加者の中に発達障害の子どもをもつ親がいたことから、プログラムの中に「学童期、思春期における発達の障害と理解」を盛り込み、その専門家を招いて講義とディスカッションを行う回に設定した。この回を参加オープンとして、発達障害に興味をもつ親たちが参加した。

5回を終了した後に、グループインタビューによって、このプログラムに参加した感想や意見を聴取し、評価とした。その結果、各回で親たちが普段考えていることやちょっとした疑問を話すことにより、自分だけの悩みや疑問でないことを確認し、思春期の特徴を理解する機会となり、また健康に関する専門的な知識についても学習し、家族と自分自身の健康に対する意識変容にもつながり得

ることが語られた。このような支援プログラムの展開は子どもの学校を通じた親たちの集まりとは異なったものである。これまで知人同士ではない思春期の子どもをもつ親が集うことで、あらたなコミュニティが形成され、普段身近な仲間とは話せない内容についても語り合えるという新たな支援の形態として期待できるのではないかと考えられる。さらに参加者らは継続した会の運営を期待しており、思春期の親支援としてこのようなプログラムの展開に対するニーズは高いことが伺えた。今後は参加者を増やし、プログラムの見直しを続けながら、精練した内容を検討し、実践を続けることが必要である。本研究において、プログラムに参加した親たち自身の健康、また家族の健康についてその向上が見られたかどうかの検討はできていない。今後はそのような評価ができるような長期的介入が望まれる。

【参考文献】

- 1) Boys Town, (2008) <http://www.boystown.org/>
- 2) Levac AM et al., (2008) Exploring parent participation in a parent training program for children's aggression: understanding and illuminating mechanisms of change. *Journal of Child and Adolescent Psychiatric Nursing*, 21 (2), pp78-88.
- 3) Andrea DR, (2005) Adolescent gender differences in mattering and wellness, *Journal of Adolescence*, 28 (6), pp 753-763.
- 4) 原田正文, (2006) カナダ生まれの親支援プログラム “Nobody's Perfect”. 世界の児童と母性, 61. 58-61.
- 5) 山本三奈, 塩飽仁, 藤田愛ほか, (2006) 母親の更年期症状が思春期から青年期にある子どものアイデンティティ形成と心身の健康に与える影響, *小児保健研究*, 65 (3), pp498-506.
- 6) 青木省三, 思春期の心の臨床, 面接の基本とすすめ方, 金剛出版, 2001年

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

- ①岸田泰子, 思春期の子どもをもつ家族のヘルスケアニーズ, 第52回日本母性衛生学会総会, 2011年9月30日, 京都市

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岸田 泰子 (KISHIDA YASUKO)

杏林大学・保健学部・教授

研究者番号: 60294237

(2)研究分担者

田村 毅 (TAMURA TAKESHI)
東京学芸大学・教育学部・教授
研究者番号：10242231
(H22→H23：研究協力者)

久保 恭子 (KUBO KYOKO)
埼玉医科大学・保健医療学部・准教授
研究者番号：10320798